

A 語句の意味と読み

(1) 人の行き来が絶えること・人通りがなくなること。／音が静まるのではなく、朱雀大路の人通りが絶えることをいう

(2) (人に) 見られる・姿を見せる。／「見ゆ」には「見える」のほかに「人に見られる・姿を見せる」の意がある。ここは後者で、「見えじ」＝姿を見られまい

(3) そっと・静かに。／気づかれぬように、の意。本文にはもう一度「やはら戸を開けて」と出てくる

(4) 不思議だ・変だ・怪しい。／★「あやし」には「みすばらしい」の意もあるが、ここは違う

(5) おうな／年老いた女・老婆。／男の「翁（おきな）」と対になる語

(6) 理解する・合点がいく。／「心得」＝納得する・のみこむ。名詞の「心得（～の心得がある）」の意味とは別物なので注意。傍線全体は打消の「ね」がつくので「わけが分からないので」となる（→設問10）

(7) かづら（かつら）／かつら・添え髪。／他人の髪を使って作る添え髪のこと

B 文法（助動詞・係り結び・敬語の種類）

(8) 婉曲（～ような）。意志と取る説明もある。「～むがために」で「～するために」の意。／★連体形の「む」＋「か」を婉曲とする教科書が多いが、意志とする教科書もある。お使いの教科書の説明に合わせる

(9) 打消意志（～まい）／未然形（「見え」）に接続する。／「見ゆ」は下二段。「見えじ」＝姿を見られまい

(10) 「ね」＝打消の助動詞「ず」の已然形／已然形＋「ば」で順接の確定条件（～ないので）。／★未然形＋「ば」（もし～ならば）との区別が頻出

(11) 結び＝「む」（連体形）。「あらむ」全体を結びとする教

科書もある。／「や」は疑問。「～ではないだろうか」と訳す

(12) 意志（～しよう）。心の中の言葉の文末にあり、盗人自身の決意を表す。／文末の「む」で主語が一人称なら意志

(13) どちらも尊敬語。ここは「にておはします」で「～でいらっしゃる」（「～である」の尊敬）、「給へ」は尊敬の補助動詞「給ふ」。／老婆が、亡くなった相手を高めて言っている

C 指す内容と敬意の方向

(14) 山城の方からやって来る大勢の人たち。／直前の「人どものあまた来る音」を受ける

(15) 姫（老婆）自身。「私の」の意。／★「おのれ」には①自分・私 ②おまえ の両方の意味があり、本文には両方が出てくる。盗人の言った「おのれは、おのれは」の「おのれ」は「おまえ」。同じ語で意味が正反対になる

(16) 謙譲語。亡くなった主人（老婆が仕えていた人）に対する、老婆からの敬意。／「置く」という動作の受け手を高めている

(17) 尊敬語（補助動詞「給ふ」の命令形）。老婆（話し手）から盗人（聞き手）への敬意。／会話文中の敬語は、話し手からの敬意

D 口語訳

(18) 火（明かり）がかすかにもしてある。／「たり」は存続（～である）

(19) これはもしかすると鬼ではないだろうか。／「や～む」で疑問。「もし」＝もしかすると

(20) 手をすり合わせて（拝むようにして）うろたえるので。／「惑ふ」＝分別を失ってあわてる

(21) 世話をする人がいないので、こうして（ここに）置き申し上げているのです。／「あつかふ」＝世話をする。「奉り」は謙譲なので「～申し上げる」

E 内容・記述

(22) 山城の方から大勢の人が来る足音がしたので、姿を見られまいと思い身を隠すため。(三十八字) / 「それに見えじと思ひて」が根拠

(23) 相手が鬼などの怪異なのか、生きた人間なのかという正体。脅して反応を見ようとした。(四十文字) / ★「もし死人にてもぞある」の解釈は教科書によって説明が分かれる。お使いの教科書の説明に合わせる

(24) 亡くなったのは自分の主人で、世話する人がいないのでここに置いている、その長い髪でかつらを作るのだ、と説明した。(五十五字) / ⑬と合わせて読む。この「生きるための言い分」が芥川『羅生門』の主題につながる

(25) 死人の衣と老婆の衣と抜き取った髪を奪い、門を下りて逃げ去った。鬼かと恐れていたが、相手が人間だと分かったと盗人の欲がむき出しになった。(六十六字) / 恐怖→強気→欲、という流れでとらえる

F 文学史

(26) 平安時代末期／説話集／「今は昔」 / 日本最大級の説話集で、千余話を収める

(27) 天竺＝インド、震旦＝中国、本朝＝日本。 / インド→中国→日本と、仏教の伝わった順に並ぶ

(28) 『羅生門』／芥川龍之介 / 芥川は、原典にない「下人が悪へ踏み出す心の動き」を結末に据えて書きかえている

【現代語訳（全文）】

今となつては昔のことだが、摂津の国のあたりから、盗みをするために都へ上つてきた男が、日がまだ暮れなかつたので、羅城門の下に身を隠して立っていたところ、朱雀大路の方に人の行き来が多かつたので、人通りが静まるまでと思つて、門の下で待つて立っていたが、山城の方から大勢の人が来る足音がしたので、その人たちに姿を見られまいと思つて、門の二階部分にそつとよじ登つたところ、見ると、火がかすかにともしてある。

盗人は、変だと思つて、連子窓からのぞいたところ、若い女が死んで横たわっている。その枕もとに火をともして、たいそう年老いた白髪の白い老婆が、その死人の枕もとに座つて、死人の髪を手荒くつかんで引き抜いているのであつた。

盗人は、これを見て、わけがわからないので、「これはもしかすると鬼ではないだろうか」と思つて恐ろしかつたけれども、「もしかすると死人であるかもしれない、脅して試してみよう」と思つて、そつと戸を開けて、刀を抜いて、「おのれは、おのれは（おまえは何者だ）」と言つて走り寄つたところ、老婆は、あわてふためいて、手をすり合わせておろおろするので、盗人は、「これはいったい何者の老婆が、こんなことをしているのか」と尋ねたところ、老婆は、「私の主人でいらつしやつた方がお亡くなりになつたのを、世話をする人がいないので、こうしてここに置き申し上げているのです。その方のお髪が、背丈より長いので、それを抜き取つてかつらにしようと思つて抜いているのです。お助けください」と言つたので、盗人は、死人の着ている衣と、老婆の着ている衣と、抜き取つてあつた髪とを奪ひ取つて、（門を）下りて走つて逃げ去つてしまつた。

※「もし死人にてもぞある」は、「もぞ」を危惧（～すると困る）ととつて「ひよつとして死人であつては大変だ」と訳す説明もある（その場合、盗人はまだ恐れている場面になる）。お使いの教科書の説明に合わせる